

## 令和7年（2025年）の桜島の火山活動

福岡管区気象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方気象台

南岳山頂火口では、噴火活動が継続しており、特に5月中旬から下旬頃には噴火活動が活発となりました。年間で噴火<sup>1)</sup>が361回発生し、このうち爆発<sup>2)</sup>は172回でした。

昭和火口では、噴火は観測されませんでした。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、概ね多い状態で経過しました。

火山性地震は概ね少ない状態で経過しました。また、主に噴火に伴う火山性微動が時々発生しました。

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、山体の膨張（隆起）を示す変動が5月中旬、7月上旬及び8月中旬に観測されました。

GNSS 連続観測では、桜島島内の基線で2024年1月頃から山体収縮に伴うとみられるわずかな縮みが認められていましたが、同年10月頃から停滞しています。また、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では、長期にわたり始良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられています。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

- 1) 桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発もしくは噴煙量が中量以上（概ね噴煙の高さが火口縁上1,000m以上）の噴火の回数を計数しています。資料の噴火回数はこの回数を示します。また、基準に達しない噴火は、ごく小規模な噴火として噴火回数に含めていません。
- 2) 桜島では、火道内の爆発による地震を伴い、爆発音、体を感じる空気の振動、噴石の火口外への飛散、または、気象台や島内の観測点で一定基準以上の空気の振動のいずれかを観測した場合に爆発としています。

### ○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025年の発表履歴

2025年中変更なし	火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）
------------	-----------------------

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局大隅河川国道事務所、京都大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、鹿児島県及び公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

## ○2025 年の活動概況

### ・噴煙など表面現象の状況（図1～4、図7、図9-①②③、図10-①②③⑨、図11-①②、表1）

南岳山頂火口では、噴火活動が継続しており、特に5月中旬から下旬頃には噴火活動が活発となりました。噴火は361回発生し、前年（2024年：99回）と比較して増加しました。このうち爆発は172回発生し、前年（2024年：46回）と比較して増加しました。噴煙の高さが火口縁上3,000m以上に達した噴火は12回発生し、前年（2024年：8回）と比較して噴煙量の多い噴火が増加しました。噴煙は最高で火口縁上4,400mまで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で5合目（南岳山頂火口から約1,400m）まで達しました。また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映をほぼ連日観測しました。

5月15日10時45分に発生した噴火は翌日（16日）04時00分頃まで継続し、噴煙は最高で3,000mまで上がりました。この噴火に伴い、15日に桜島島内で実施した現地調査では、鹿児島市黒神町で多量の降灰を観測しました。なお、小さな噴石は確認されませんでした。

昭和火口では、噴火及び火映は観測されず、活動は低調な状態で経過しました（2024年：噴火、爆発なし）。

### ・地震や微動の発生状況（図9-⑥～⑧、図10-⑥～⑧、図11-④⑤、図12）

火山性地震は5月中旬及び12月下旬にやや多い状態となりましたが、期間を通して概ね少ない状態で経過しました。火山性地震は年間で3,001回発生し、前年（2024年：1,696回）と比較して増加しました。このうち、桜島南西側を震源とする火山性地震は年間で23回発生し、前年（2024年：68回）と比較して減少しました。

震源は、主に南岳直下のごく浅いところから深さ3km付近に分布しました。その他に、北岳付近の深さ1km付近、桜島南西側の深さ6～10km付近及び桜島東側の深さ6～7km付近に分布しました。

火山性微動は主に噴火に伴って発生したほか、12月は火山性微動の継続時間が増加しました。火山性微動の継続時間の年合計は174時間15分（2024年：11時間10分）で、前年と比較して大幅に増加しました。

### ・地殻変動の状況（図13～15）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、急激な山体の膨張（隆起）が5月中旬から約1ヶ月半の周期で計3回観測されました。1回目は5月12日頃から、2回目は7月5日頃から、3回目は8月19日頃からで、膨張はいずれも1日から3日間程度継続しました。膨張直後からは噴火活動の活発化がみられましたが、いずれの場合もその膨張の大部分は解消せずに経過しました。また、それぞれ急激な膨張の前には、半月から1ヶ月半にわたる緩やかな山体の収縮（沈降）が観測されました。その他、一部の噴火に伴い、噴火前の山体の膨張（隆起）及び噴火後の収縮（沈降）を示す変動が観測され、5月18日から22日の噴火活動活発化の際には、数十分～数時間の短い間隔で繰り返しみられました。

GNSS連続観測では、桜島島内の基線で2024年1月頃から山体収縮に伴うとみられるわずかな縮みが認められていましたが、同年10月頃から停滞しています。また、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では長期にわたり始良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられています。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

・降灰の状況（図8、図9-④、図10-⑤、図11-③、表2）

鹿児島地方気象台では、年合計では254g/m<sup>2</sup>(降灰日数76日)の降灰<sup>3)</sup>を観測し、月別では5月が最も多く月合計204g/m<sup>2</sup>を観測しました。

鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した2025年の火山灰の総噴出量は、約89万トン（2024年：約28万トン）で、前年と比較して増加しました。

・火山ガスの状況（図9-⑤、図10-④）

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、300～11,200トンでした。噴火活動の活発化に伴って放出量が増加し、5月20日には、1日あたり11,200トンと大きく増加しました。火山ガスの放出量は、2022年7月以降概ね多い状態で経過しています。

・南岳山頂火口及び昭和火口の状況（図3、図5、図6）

繰り返し実施した桜島島内及びその周辺における赤外熱映像装置による観測では、昭和火口内壁の一部、昭和火口近傍、南岳南東山腹及び南岳南南東山腹で引き続き地熱域を確認しましたが、特段の変化は認められませんでした。夜間における観測では、肉眼でようやく認められる程度の南岳山頂火口の火映を時々観測しました。また、かすかに感じる程度の火山ガスの臭気、降っているのがようやくわかる程度の降灰及び注意深くしていると聞こえる程度の鳴動を観測しました。

7月9日に第十管区海上保安本部、12月12日に陸上自衛隊第8飛行隊の協力により実施した上空からの観測では、南岳山頂火口内及び火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。B火口内の地熱域は、2023年以降の観測時は南岳山頂火口の中心付近（A火口側）に分布していましたが、12月12日の観測では昭和火口側に分布しており、地熱域の分布に変化が認められました。昭和火口では、2023年の噴火により形成された火口内北側の火孔の内壁で白色噴煙を確認しました。また、噴煙の噴出場所付近では地熱域を確認しました。

- 3) 鹿児島地方気象台（東郡元：南岳の西南西約11km）において、前日09時～当日09時の1日間に降った1m<sup>2</sup>あたりの降灰量の年合計です。降灰量は0.5g/m<sup>2</sup>未満切り捨て、「0」は、0.5g/m<sup>2</sup>未満の降灰を観測したことを表します。2025年6月以降の降灰量には新燃岳の火山灰が含まれている可能性があります。



図1 桜島 11月16日00時57分に発生した南岳山頂火口の爆発の状況（牛根監視カメラ）  
噴煙が火口縁上4,400mまで上がりました。



図2 桜島 7月17日13時28分に発生した南岳山頂火口の爆発の状況  
（砂防センター監視カメラ（大隅河川国道事務所設置））  
弾道を描いて飛散する大きな噴石が5合目（南岳山頂火口から約1,400m）まで達しました  
（黄破線内）。

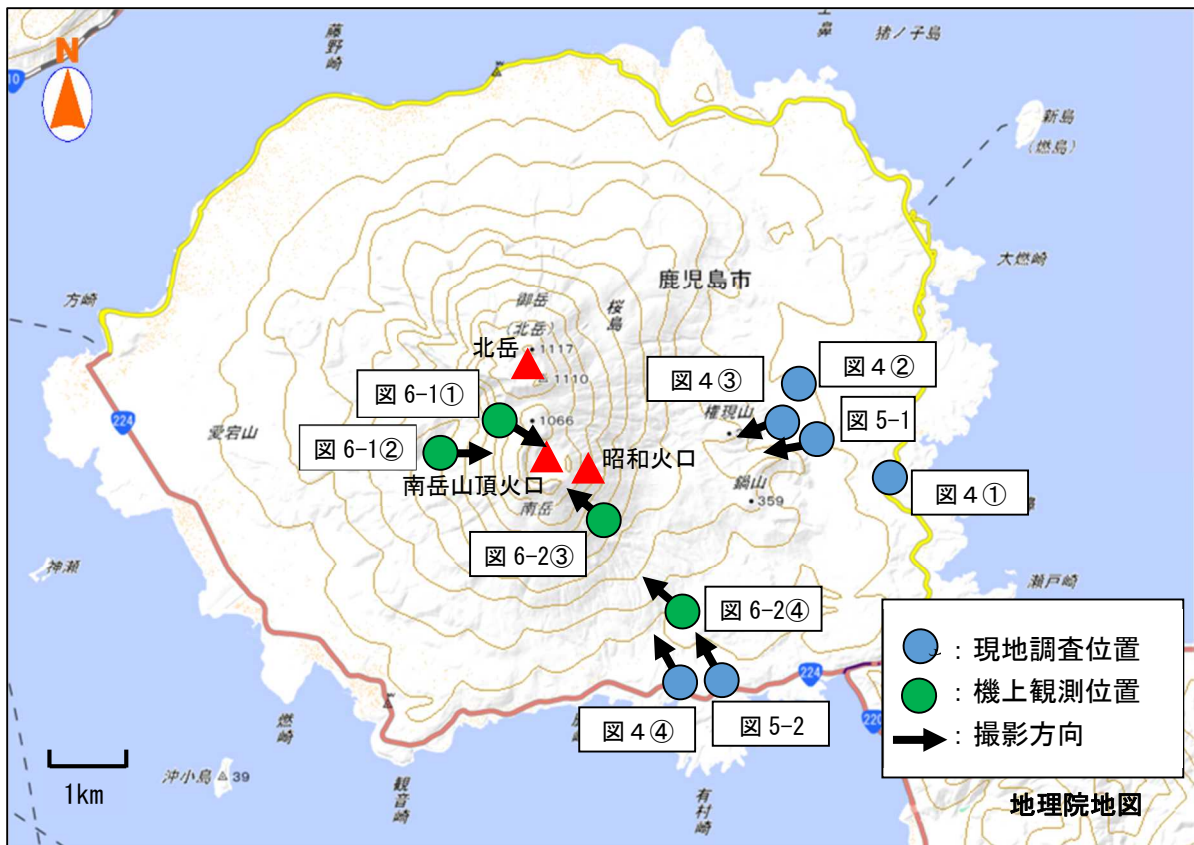


図3 桜島 図4～6の観測位置及び撮影方向



図4 桜島 5月15日の降灰の状況（鹿児島市黒神町①～③、鹿児島市有村町④）

5月15日10時45分に発生した噴火は翌日（16日）04時00分頃まで継続し、噴煙は最高で3,000mまで上がりました。この噴火に伴い、15日に桜島島内で実施した現地調査では、鹿児島市黒神町で多量の降灰を観測しました。なお、小さな噴石は確認されませんでした。



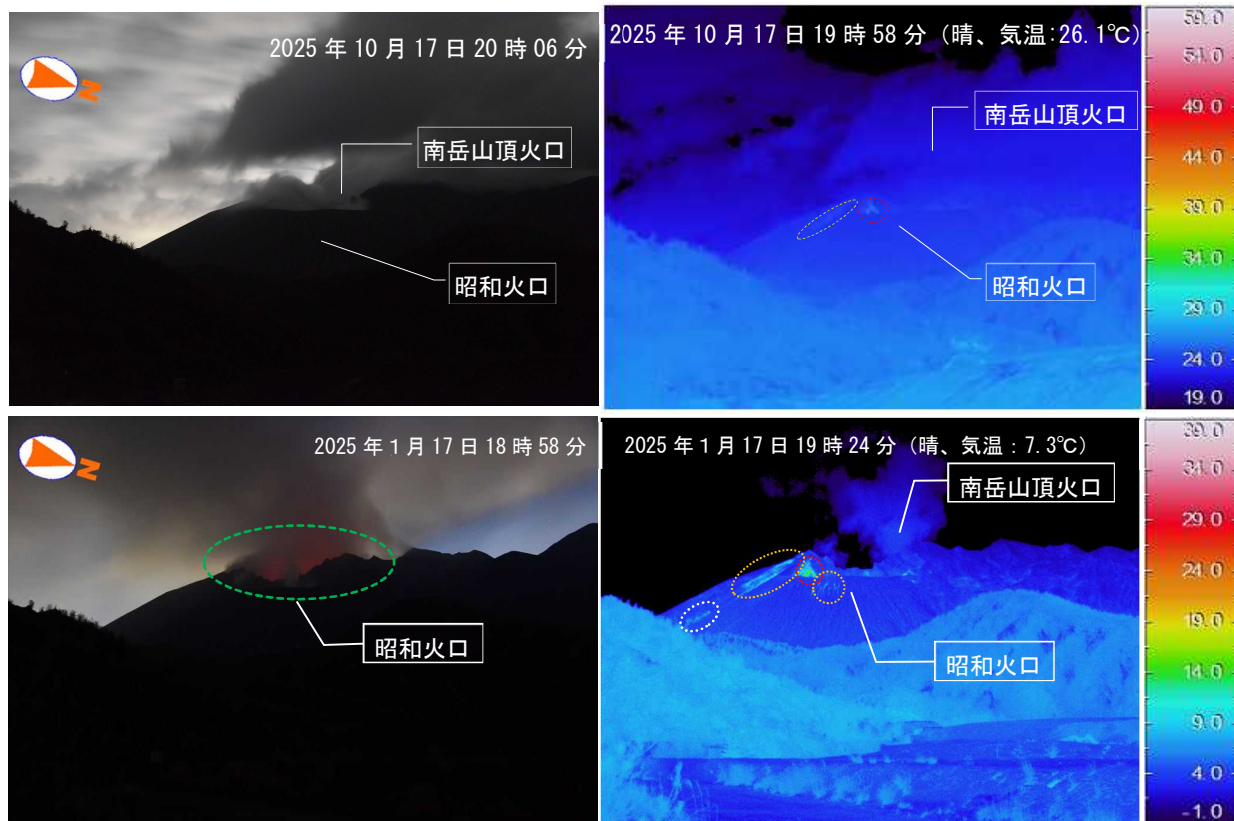


図 5-1 桜島 南岳山頂火口及び昭和火口周辺の状況（黒神町（黒神河原）から観測）

- ・南岳山頂火口において、高感度撮影により南岳山頂火口からの火映を時々観測しました（緑破線内）。
- ・赤外熱映像装置による観測では、昭和火口内壁の一部（赤破線内）、昭和火口近傍（橙破線内）及び南岳南東山腹（白破線内）で地熱域を確認しました。

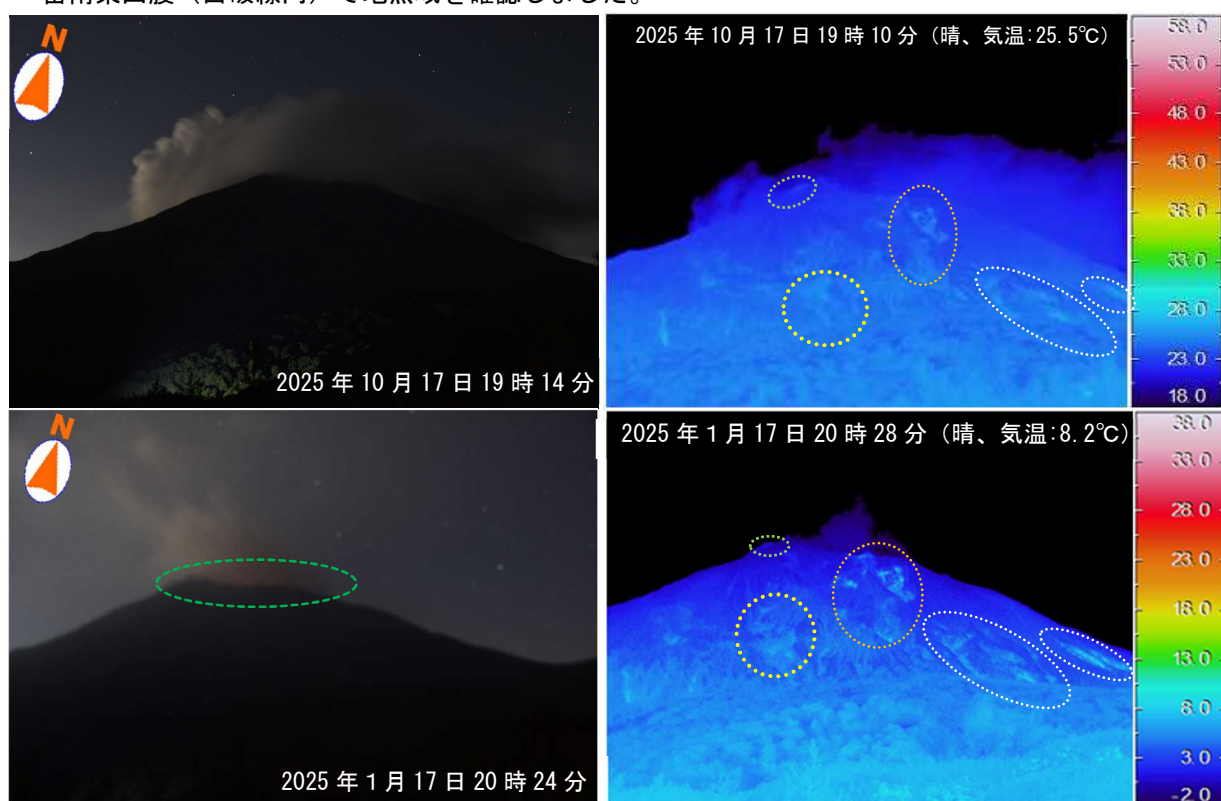


図 5-2 桜島 南岳山頂火口、昭和火口周辺及び南側山腹付近の状況（有村町（有村溶岩展望所）から観測）

- ・デジタルカメラの高感度撮影では、南岳山頂火口からの火映を観測しました（緑破線内）。
- ・赤外熱映像装置による観測では、南岳山頂火口縁（黄緑破線内）、南岳南南東側山腹（黄破線内）、南岳南東側山腹（白破線内）及び昭和火口近傍（橙破線内）に引き続き地熱域が認められました。
- ・観測中にかすかな火山ガスの臭気と降灰を観測しました。



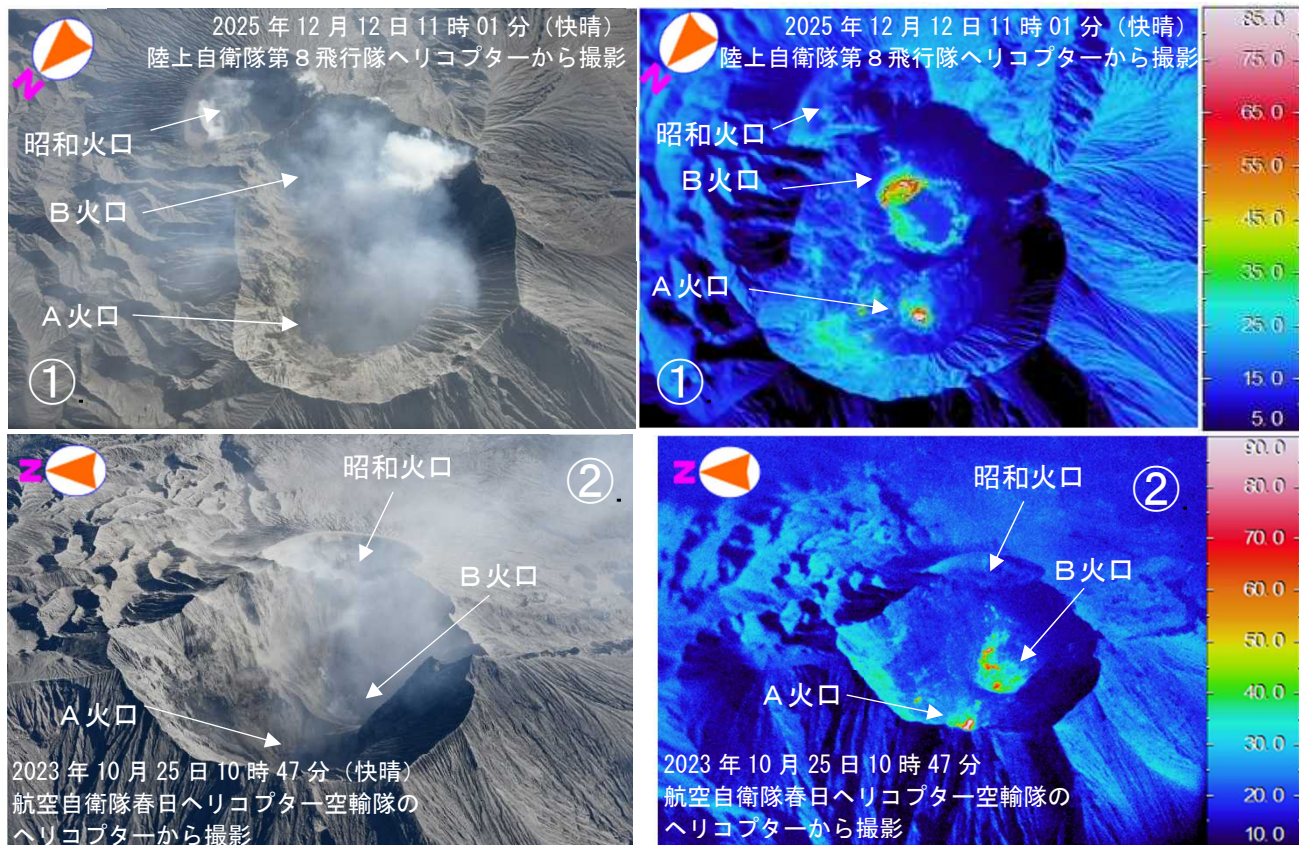


図 6-1 桜島 南岳山頂火口内と周辺の状況

- ・南岳山頂火口内に地熱域を確認しました。
- ・B火口内の地熱域は、2023年以降の観測時は南岳山頂火口の中心付近（A火口側）に分布していましたが、12月12日の観測では昭和火口側に分布しており、地熱域の分布に変化が認められました。

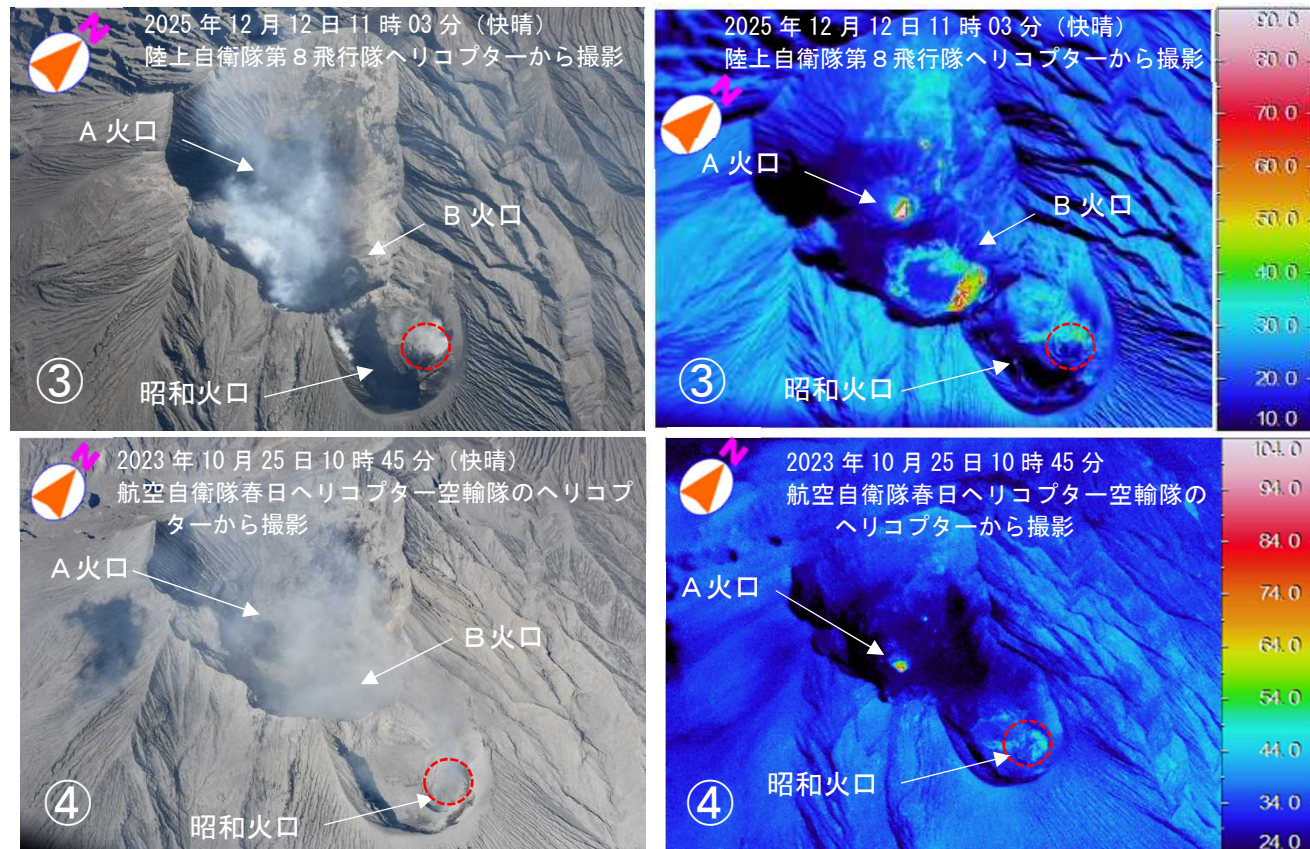


図 6-2 桜島 南岳山頂火口と昭和火口の状況

昭和火口では、2023年の噴火により形成された火口内北側の火孔の内壁で白色噴煙を確認し、噴煙の噴出場所付近では地熱域を確認しました（赤破線内）。

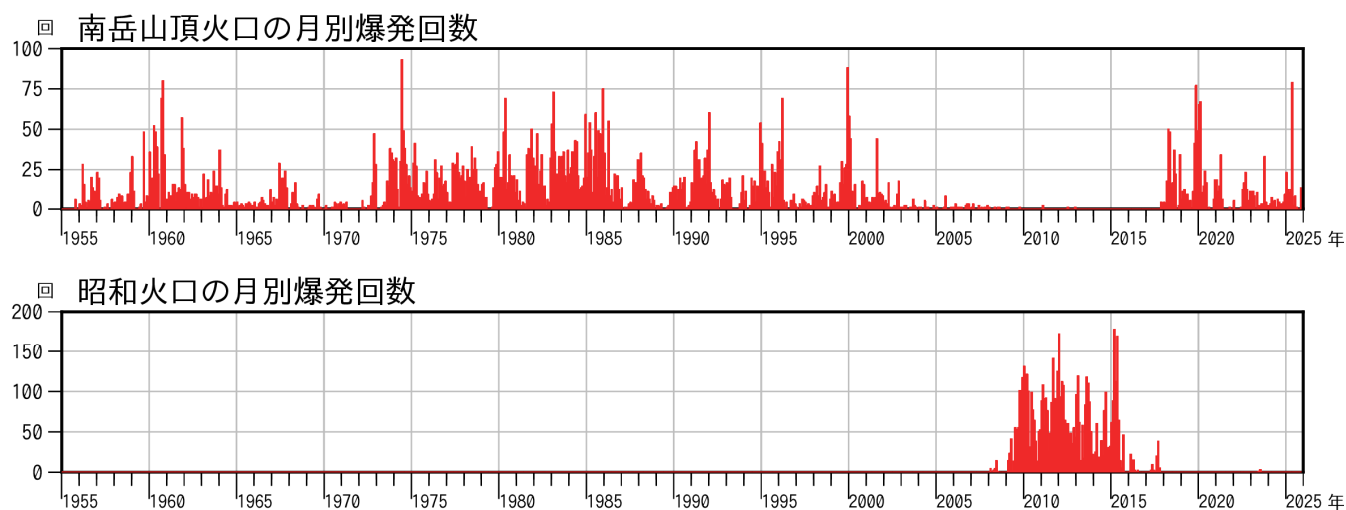


図 7-1 桜島 南岳山頂火口（上図）と昭和火口（下図）の月別爆発回数（1955 年 1 月～2025 年 12 月）

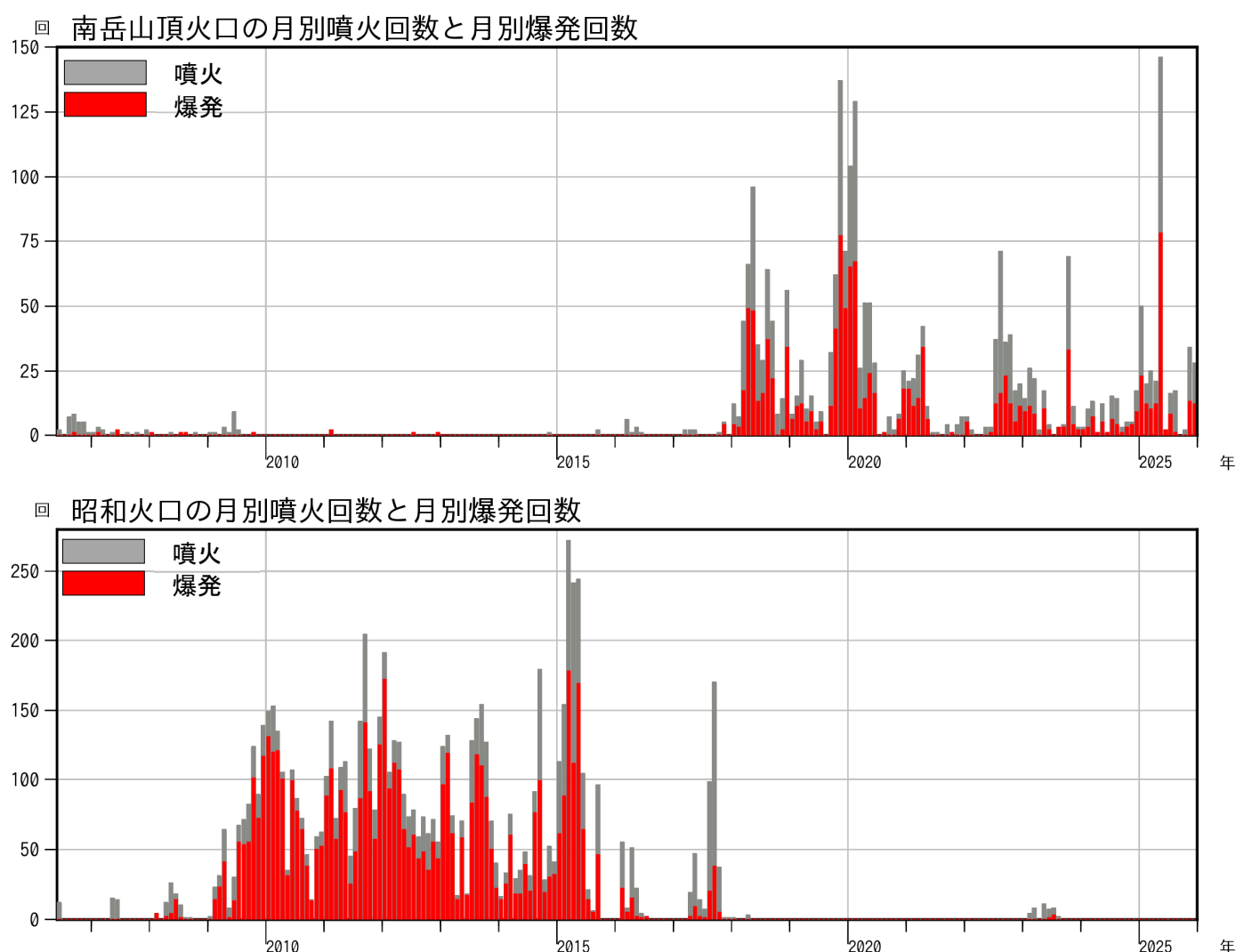


図 7-2 桜島 南岳山頂火口（上図）と昭和火口（下図）の月別噴火回数（灰色）と月別爆発回数（赤色）（2006 年 6 月～2025 年 12 月）

## &lt;2025 年の状況&gt;

- ・南岳山頂火口では、噴火が 361 回発生し、このうち 172 回が爆発でした（2024 年：噴火 99 回、爆発 46 回）。
- ・昭和火口では、噴火は観測されませんでした。（2024 年：噴火、爆発なし）。



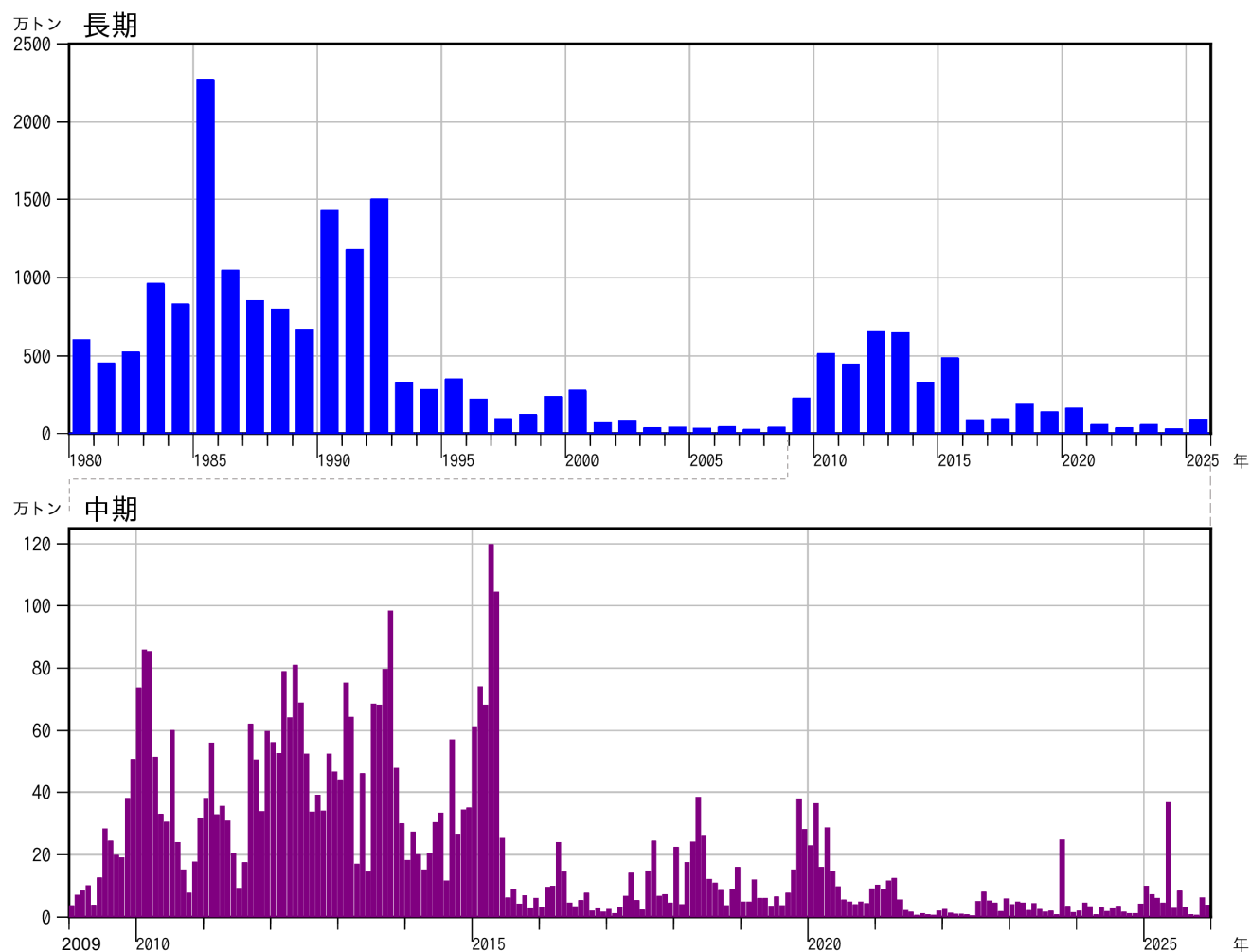


図8 桜島 鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した火山灰の総噴出量  
(上段：1980年～2025年の年別値、下段：2009年1月～2025年12月の月別値)

2025年の総噴出量は、約89万トン（2024年：約28万トン）でした。

※鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成しました。

※降灰の観測データには、風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性があります。

※2025年6月以降の観測データには、新燃岳の火山灰も含まれている可能性があります。

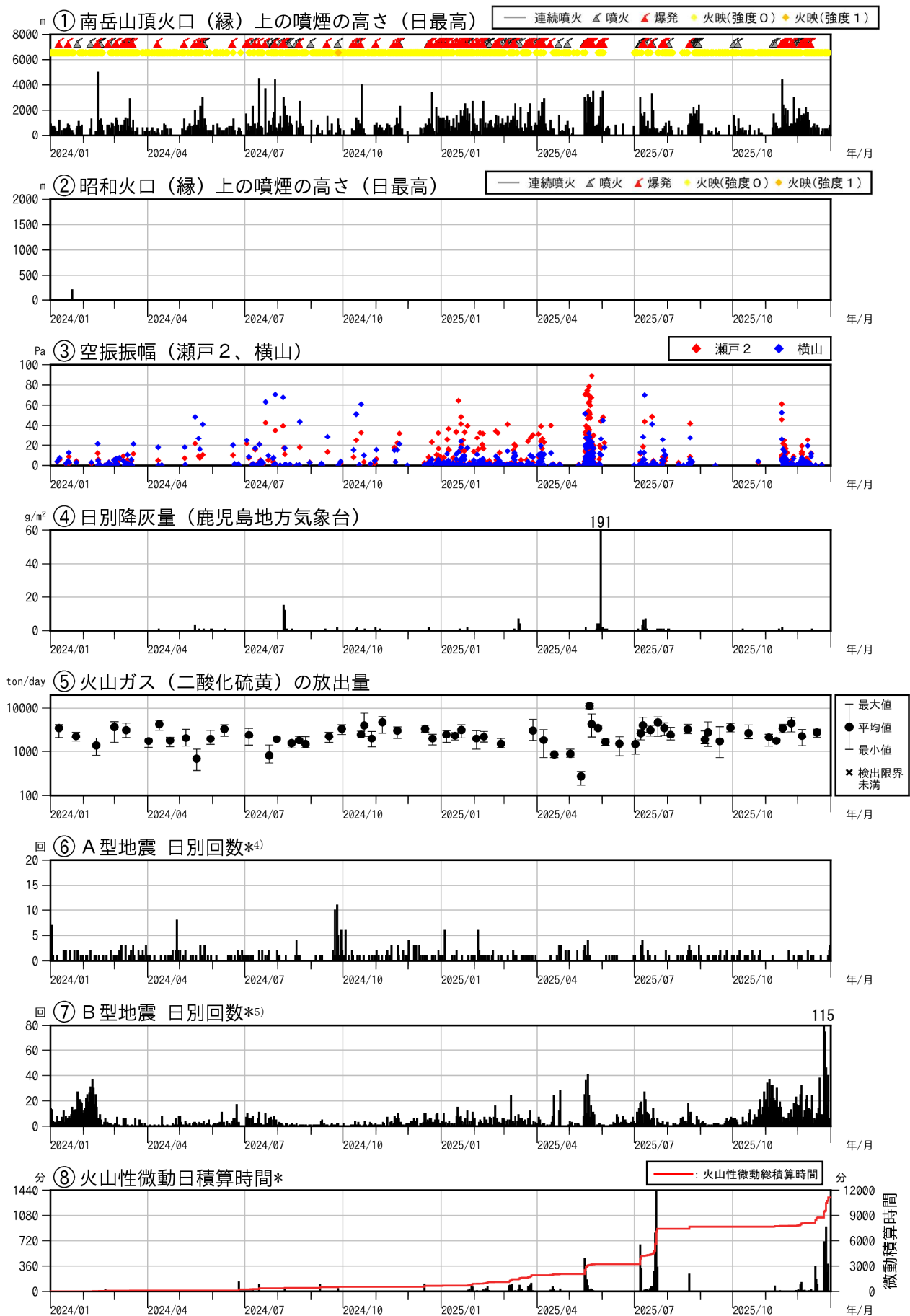


図9 桜島 最近2年間の活動経過図（2024年1月～2025年12月）

※図の説明は次ページに掲載しています。

## 図9の説明

## &lt;2025年の状況&gt;

- ・南岳山頂火口では、噴火活動が継続しており、特に5月中旬から下旬頃には噴火活動が活発となりました。噴火は361回発生し、前年（2024年：99回）と比較して増加しました。このうち爆発は172回と前年（2024年：46回）と比較して増加しました。噴煙の高さが火口縁上3,000m以上に達する噴火は12回発生し、前年（2024年：8回）と比較して噴煙量の多い噴火が増加しました。また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映をほぼ連日観測しました。
- ・昭和火口では、噴火及び火映は観測されず、活動は低調な状態で経過しました（2024年：噴火、爆発なし）。
- ・鹿児島地方気象台では、年合計では254g/m<sup>2</sup>（降灰日数76日）の降灰を観測し、月別では5月が最も多く月合計204g/m<sup>2</sup>を観測しました。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、300～11,200トンでした。火山ガスの放出量は引き続き、2022年7月以降概ね多い状態で経過しています。
- ・火山性地震は5月中旬及び12月下旬にやや多い状態となりましたが、期間を通して概ね少ない状態で経過しました。火山性地震は年間で3,001回発生し、前年（2024年：1,696回）と比較して増加しました。このうち、桜島南西側を震源とする火山性地震は年間で23回発生し、前年（2024年：68回）と比較して減少しました。
- ・火山性微動は主に噴火に伴って発生したほか、12月は火山性微動の継続時間が増加しました。火山性微動の継続時間の年合計は174時間15分（2024年：11時間10分）で、前年と比較して大幅に増加しました。

※①②では白色及び色不明の噴煙の高さは除いています。

※①②で高感度の監視カメラでようやく認められる程度の火映を黄色で、現地調査等において肉眼でようやく認められる程度の火映を橙色で示しています。

\*「あみだ川観測点及び横山観測点」で計数（計数基準 あみだ川：水平動2.5μm/s以上 横山：水平動1.0μm/s以上）

※あみだ川観測点地震計の機器障害により、赤生原観測点（水平動0.5μm/s以上）で計数している期間があります。

- 4) 火山性地震のうち、A型地震はP波やS波の相が明瞭で比較的周期の短い地震で、一般的に起こる地震と同様、応力集中による地殻の破壊によって発生していると考えられますが、火山活動に直接関係する発生原因として、マグマの貫入に伴う火道周辺の岩石破壊などの例があります。
- 5) 火山性地震のうち、B型地震は相が不明瞭で比較的周期が長い地震で、火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられています。



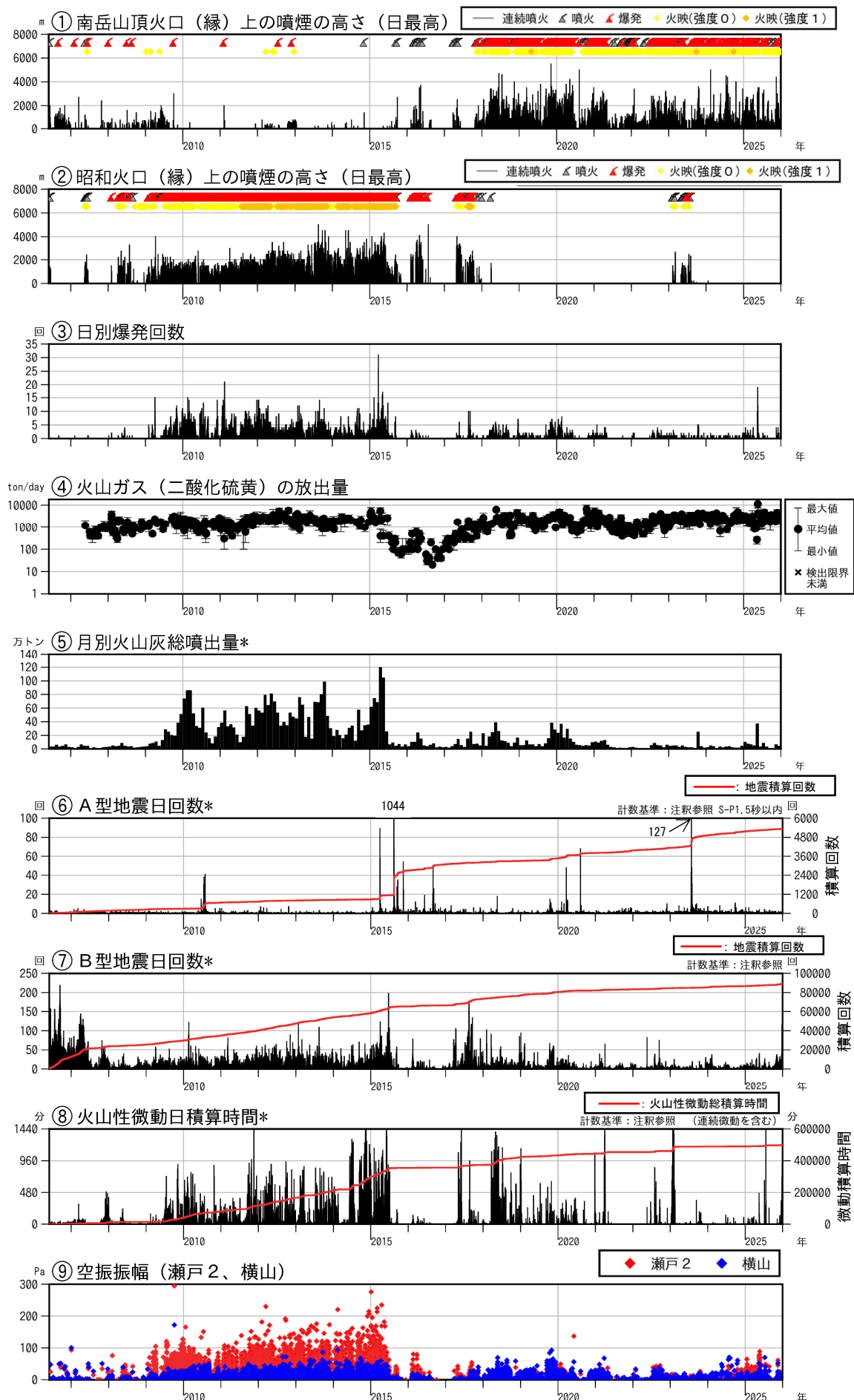


図 10 桜島 昭和火口噴火活動再開（2006 年 6 月）以降の活動経過図（2006 年 6 月～2025 年 12 月）

※図の説明は次ページに掲載しています。

図 10 の説明

## &lt;2025 年の状況&gt;

- ・ 2025 年の総降灰量は約 89 万トンでした（2024 年：約 28 万トン）。昭和火口での噴火活動が主であった 2010 年から 2015 年頃に比べて少ない状態で経過しました。
- ・ 火山ガスの放出量は 2022 年 7 月以降概ね多い状態で経過しています。

\* 鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成しました。降灰の観測データには、桜島で噴火がない場合でも風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性があります。

\* 2014 年 5 月 23 日までは「赤生原観測点及び横山観測点」で計数（計数基準 赤生原：水平動  $0.5 \mu\text{m/s}$  横山：水平動  $1.0 \mu\text{m/s}$ ）していましたが、2012 年 7 月 19～26 日、11 月 18～22 日は赤生原観測点障害のため、2014 年 5 月 24 日以降は赤生原周辺の工事ノイズ混入のため「あみだ川観測点及び横山観測点」で計数（計数基準 あみだ川：水平動  $2.5 \mu\text{m/s}$  横山：水平動  $1.0 \mu\text{m/s}$ ）しています。

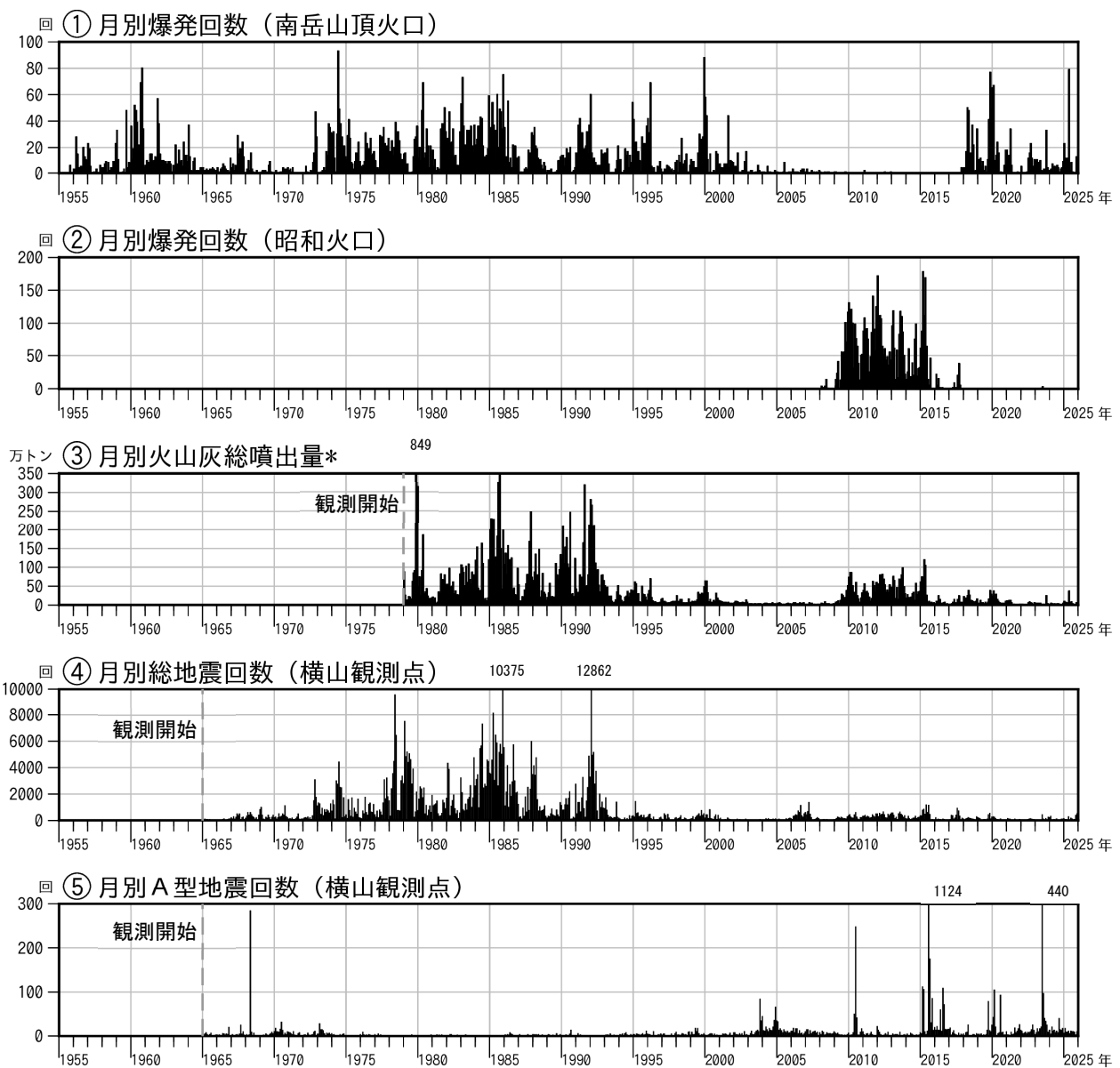


図 11 桜島 長期の活動状況（1955 年～2025 年）

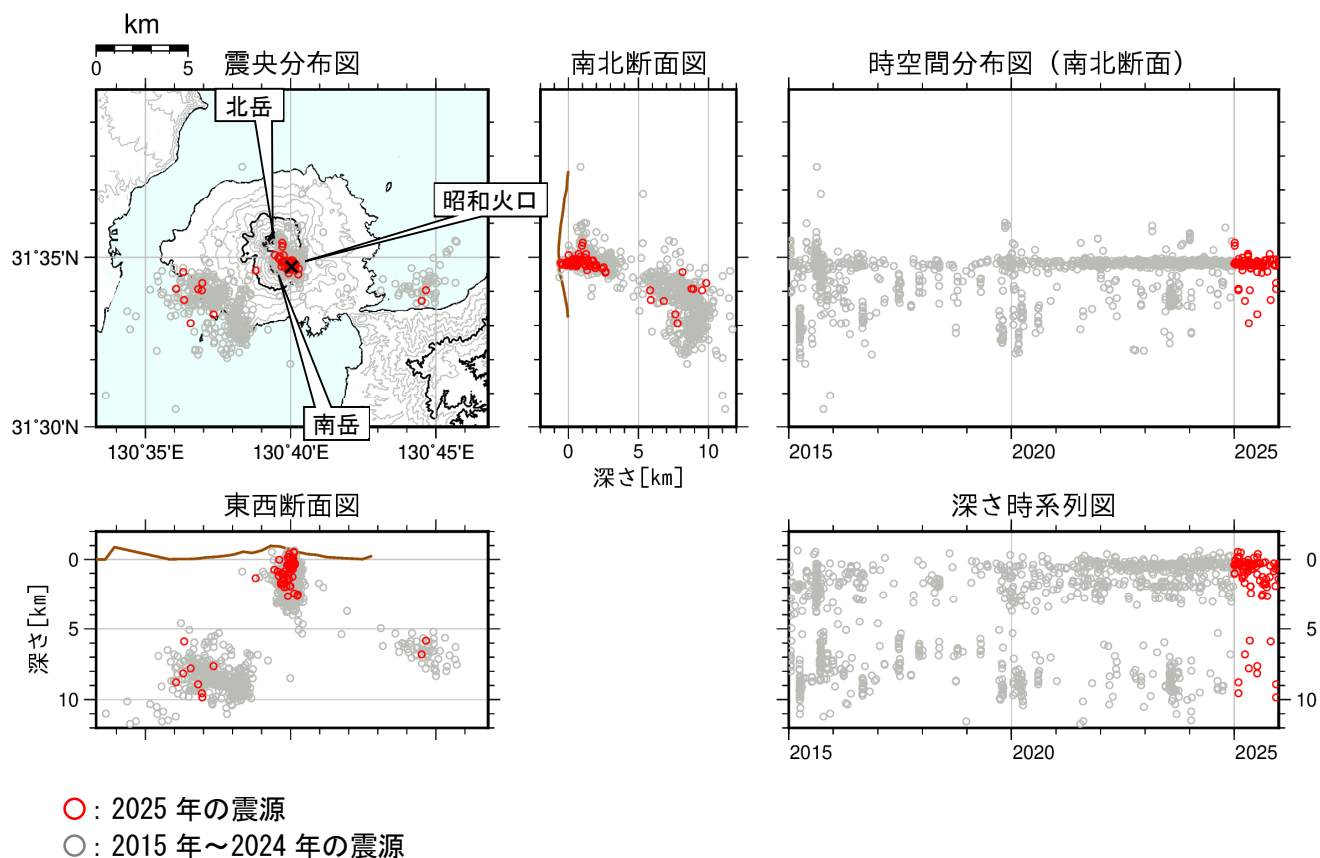


図 12 桜島 火山性地震の震源分布図 (2015 年～2025 年)

## &lt;2025 年の状況&gt;

震源は、主に南岳直下のごく浅いところから深さ 3 km 付近に分布しました。その他に、北岳付近の深さ 1 km 付近、桜島南西側の深さ 6～10km 付近及び桜島東側の深さ 6～7 km 付近に分布しました。



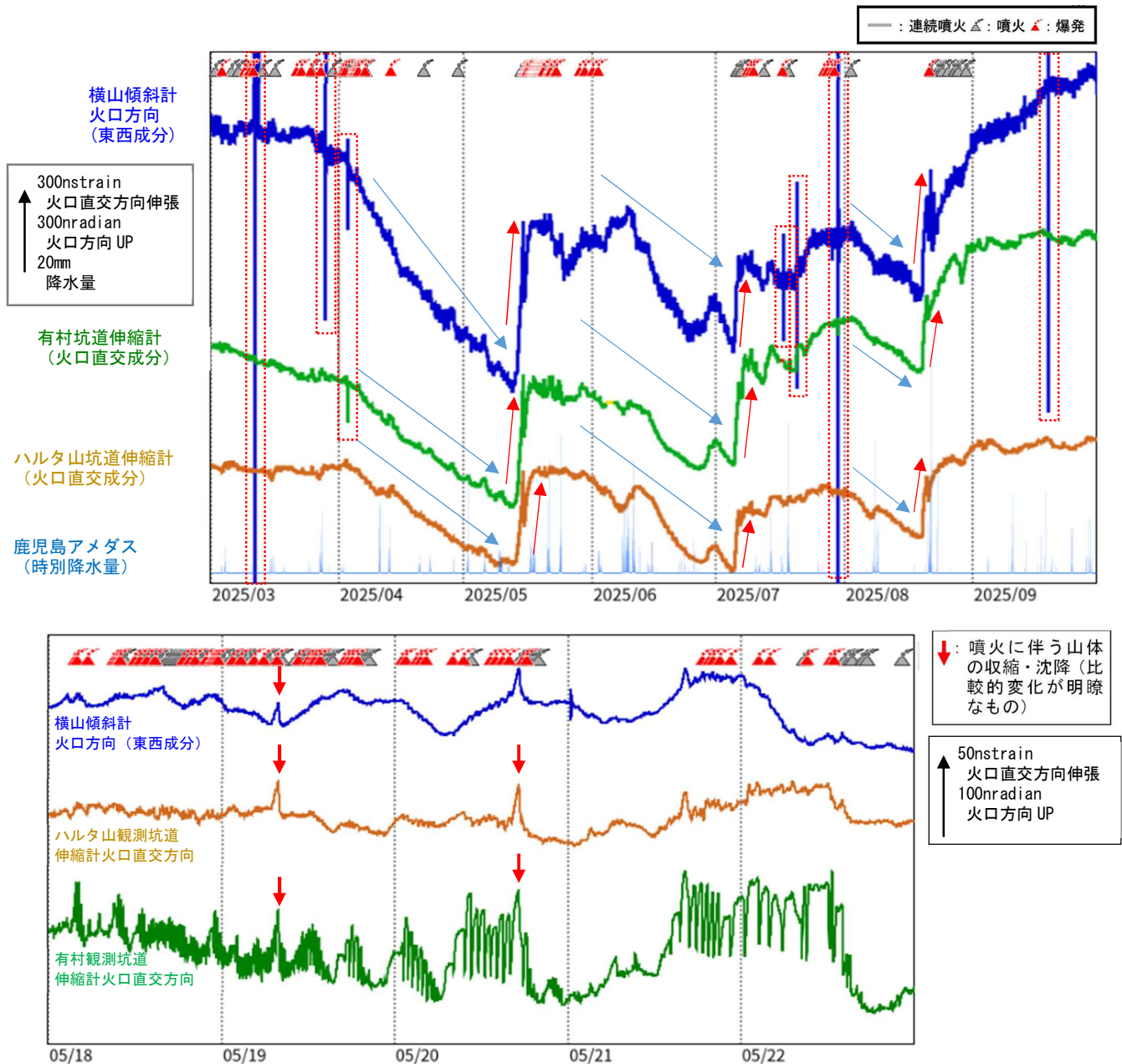


図 13 桜島 傾斜計及び伸縮計による地殻変動の状況

(上段 : 2025 年 3 月～9 月の時間値、下段 : 2025 年 5 月 18 日～22 日の分値)

- ・ 桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、急激な山体の膨張（隆起）が 5 月中旬から約 1 ヶ月半の周期で計 3 回観測されました（赤矢印）。1 回目は 5 月 12 日頃から、2 回目は 7 月 5 日頃から、3 回目は 8 月 19 日頃からで、膨張はいずれも 1 日から 3 日間程度継続しました。膨張直後からは噴火活動の活発化がみられましたが、いずれの場合もその膨張の大部分は解消せず経過しました。また、それぞれ急激な膨張の前には、半月から 1 ヶ月半にわたる緩やかな山体の収縮（沈降）が観測されました（青矢印）。
- ・ 5 月 18 日から 22 日にかけては特に噴火活動が活発化し、噴火や爆発に伴うわずかな山体の膨張（隆起）と収縮（沈降）が数十分～数時間の短い間隔で繰り返されました。

※赤破線内で示す変化は、遠地地震の影響によるものと考えられます。

※横山観測点は山頂火口域のほぼ西に位置していることから、傾斜計東西成分の東側が上がる傾斜変動を火口側が上がる変動とみなして表示しています。

※各観測点のデータには、潮汐補正を行っています。

※図の作成には、大隅河川国道事務所の有村観測坑道及び京都大学のハルタ山観測坑道の観測データを使用しています。

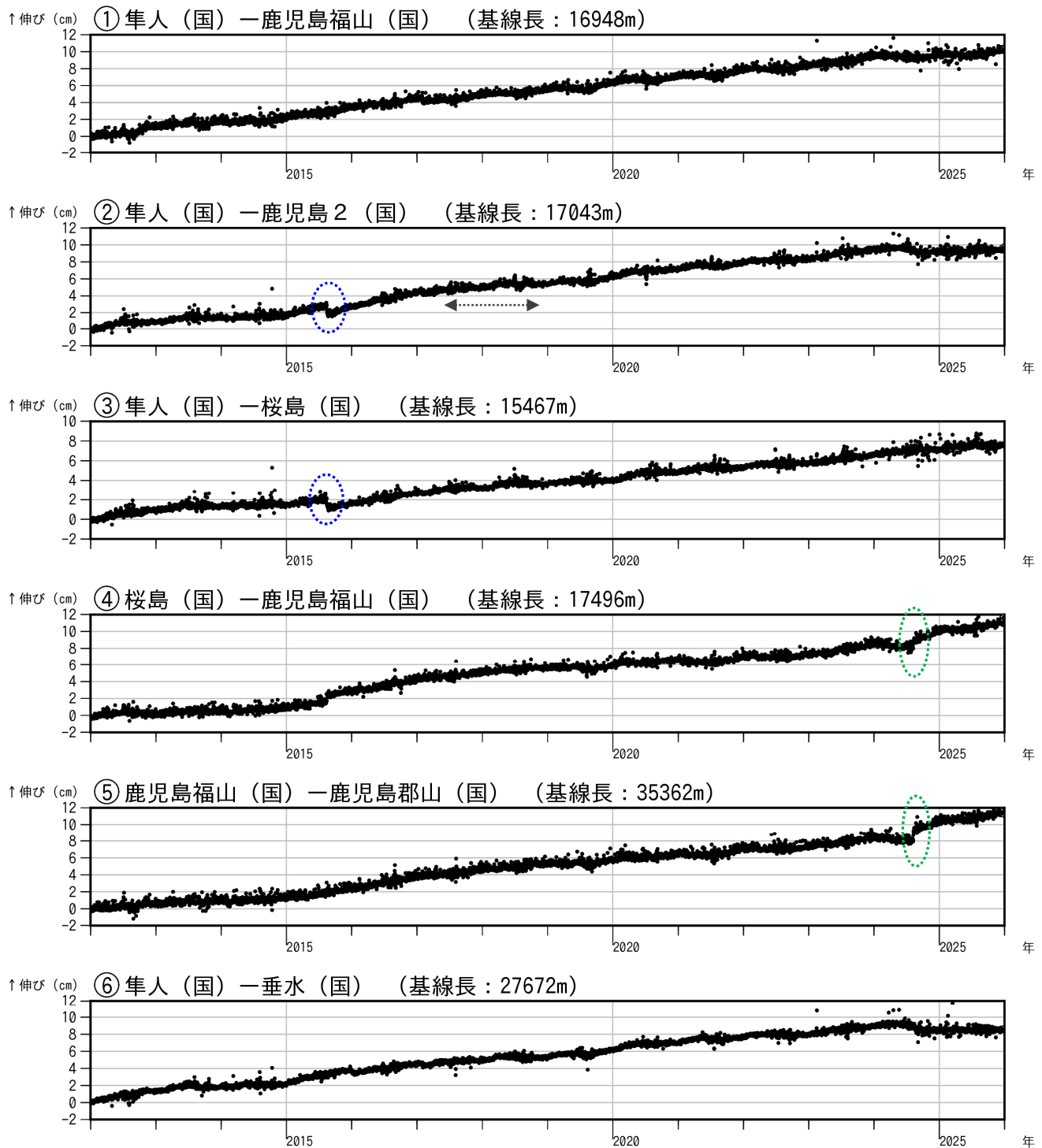


図 14-1 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2012 年 1 月～2025 年 12 月)

始良カルデラ (鹿児島湾奥部) を挟む基線では、長期にわたり始良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられています。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

これらの基線は図 15 の①～⑥に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

基線②は霧島山の深い場所での膨張によるとみられる変動の影響を受けている可能性があります (黒破線矢印期間内)。

基線④⑤の緑色の破線内は 2024 年 8 月 8 日の日向灘の地震による変動です。

青色の破線円内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

(国): 国土地理院

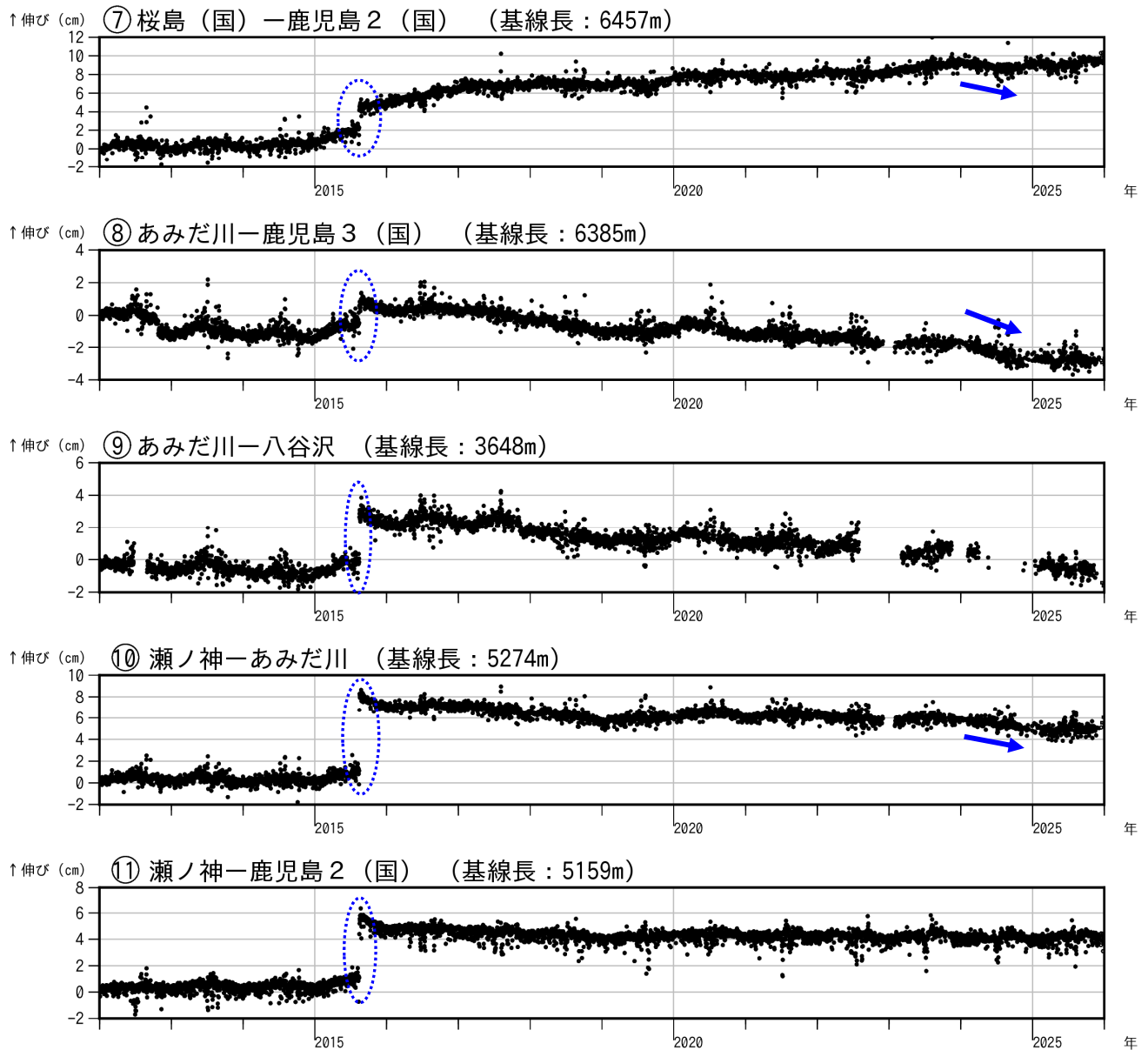


図 14-2 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2012 年 1 月～2025 年 12 月)

GNSS 連続観測では、桜島島内の基線で 2024 年 1 月頃から山体収縮に伴うとみられるわずかな縮みが認められていました (青矢印) が、同年 10 月頃から停滞しています。

これらの基線は図 15 の⑦～⑪に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

青色の破線円内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

(国): 国土地理院



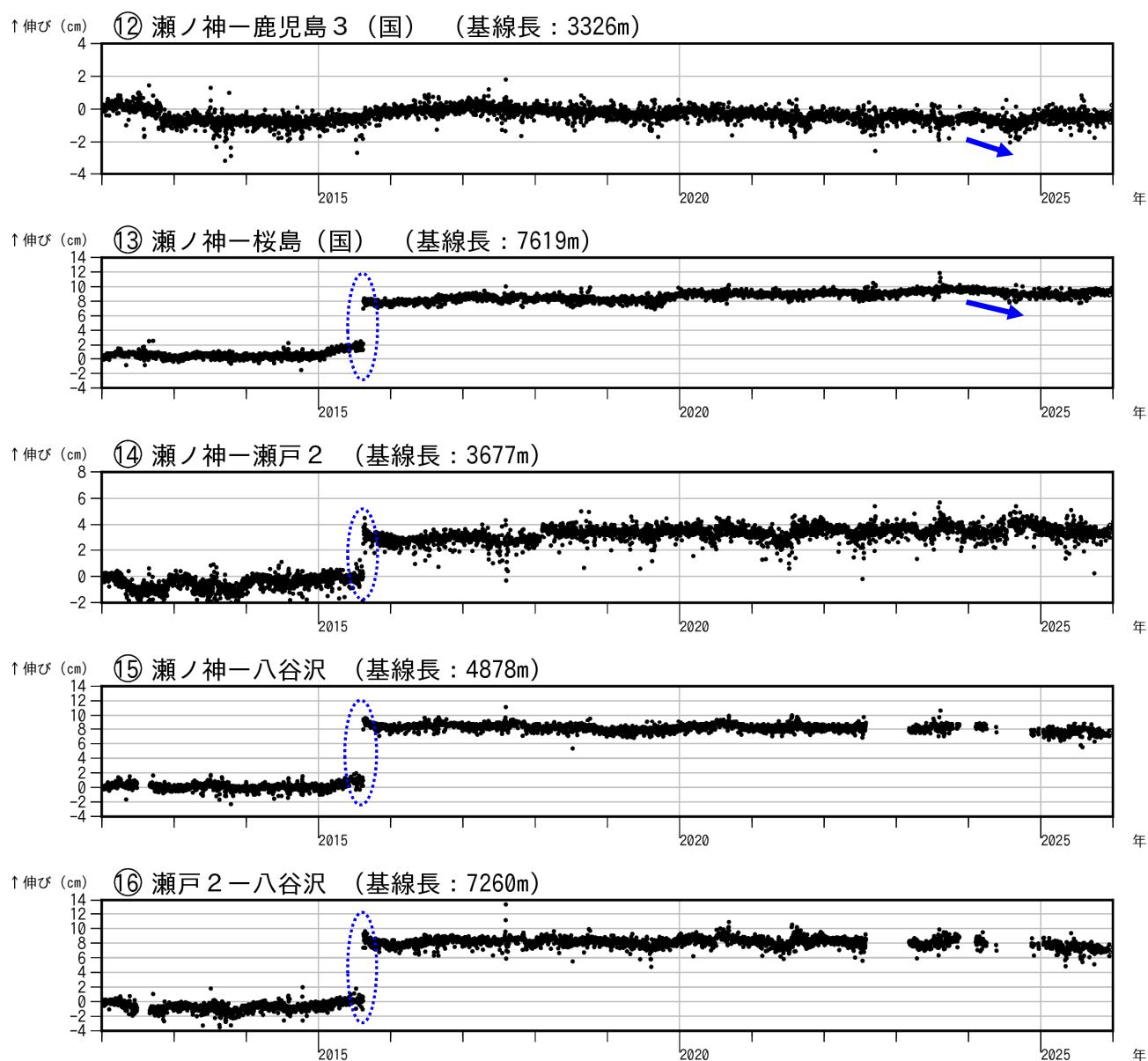


図 14-3 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2012 年 1 月～2025 年 12 月)

GNSS 連続観測では、桜島島内の基線で 2024 年 1 月頃から山体収縮に伴うとみられるわずかな縮みが認められていました（青矢印）が、同年 10 月頃から停滞しています。

これらの基線は図 15 の⑫～⑯に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

青色の破線円内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

(国)：国土地理院

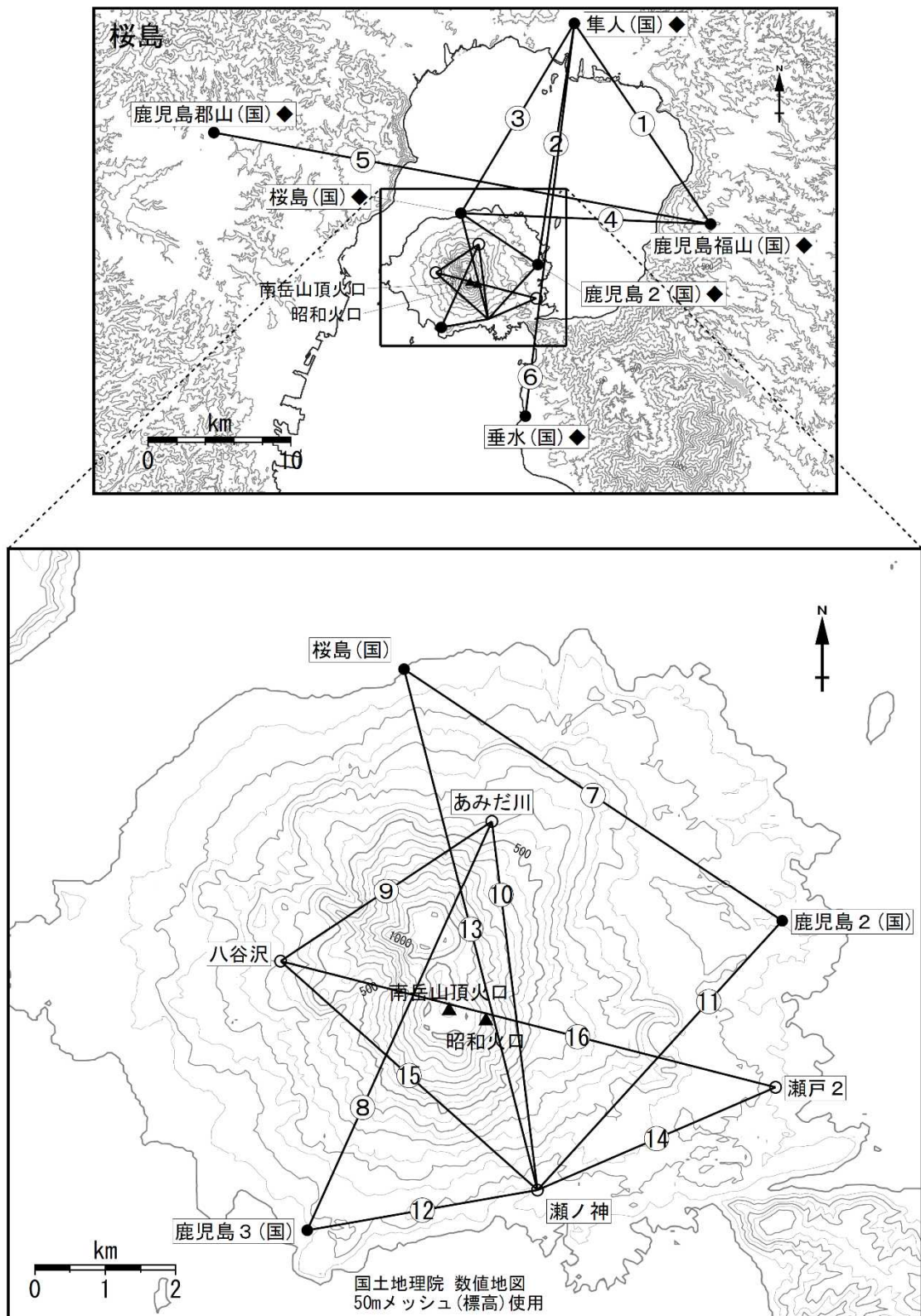


図 15 桜島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
（国）：国土地理院

表1 桜島 2025年の主な噴火（火口縁上の噴煙の高さ3,000m以上を観測した噴火）

現象	火口	噴火発生日時 (年月日時分)	噴煙の 色	噴煙量	噴煙の火口縁 上の高さ(m)	流向	噴石 (合目)	火砕流 (m)	桜島島内 最大空振 (Pa)
噴火	山頂 (A)	2025/5/15 11:35	灰白色	多量	3000	南東	-	-	2.3 (瀬戸)
爆発	山頂 (B)	2025/5/18 18:54	灰白色	やや多量	3200	南東	9	-	29.1 (瀬戸)
爆発	山頂 (B)	2025/5/20 15:00	灰白色	多量	3000	北	不明	-	16.1 (瀬戸)
爆発	山頂 (B)	2025/5/23 18:56	灰白色	>やや多量	>3500	北東	6	-	19.4 (瀬戸)
爆発	山頂 (A)	2025/5/30 17:27	灰白色	多量	3000	南	-	-	44.3 (瀬戸)
爆発	山頂 (A)	2025/5/30 20:58	灰白色	多量	3000	南	8	-	16.9 (瀬戸)
爆発	山頂 (A)	2025/6/1 16:10	灰白色	やや多量	3500	南東	6	-	48.2 (瀬戸)
噴火	山頂 (B)	2025/7/6 9:33	灰白色	やや多量	3000	南東	-	-	4.7 (瀬戸)
爆発	山頂 (A)	2025/7/17 13:28	灰色	やや多量	3300	北	5	-	48.8 (瀬戸)
爆発	山頂 (B)	2025/11/16 0:57	灰白色	多量	4400	直上	5	-	45.9 (瀬戸)
爆発	山頂 (B)	2025/11/16 2:28	灰白色	やや多量	3700	東	5	-	61.3 (瀬戸)
爆発	山頂 (B)	2025/11/27 2:23	灰白色	多量	3000	東	9	-	8.8 (瀬戸)



表2 桜島 2025年鹿児島地方気象台の日別降灰量(単位は「g/m<sup>2</sup>」)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1日						2		1	0			
2日				0				1				
3日		0				1				0		
4日						0	1					
5日						1						
6日						0						0
7日				0								
8日			0			0	3			0	0	
9日			0				6					
10日			1				2			1		
11日			0				7				0	0
12日			0				1					
13日							0				1	
14日			7									1
15日			4									
16日			0		2				0		2	0
17日					0			0			0	
18日	1						0					
19日												0
20日												
21日							0					
22日							1					
23日							0					
24日					0		1			0		
25日	2			0			0			0		
26日	0				1		1			0		
27日					4		0		0			
28日					0		1					
29日					4		0	0		0		
30日				0	191		0	0			0	
31日					2		0					
月合計	3	0	12	0	204	4	24	2	0	1	3	1
年合計	254											

- ・「0」は0.5g/m<sup>2</sup>未満のわずかな降灰を観測したことを表します。
- ・空欄は降灰を全く観測しなかったことを表します。
- ・「×」は欠測を表します。

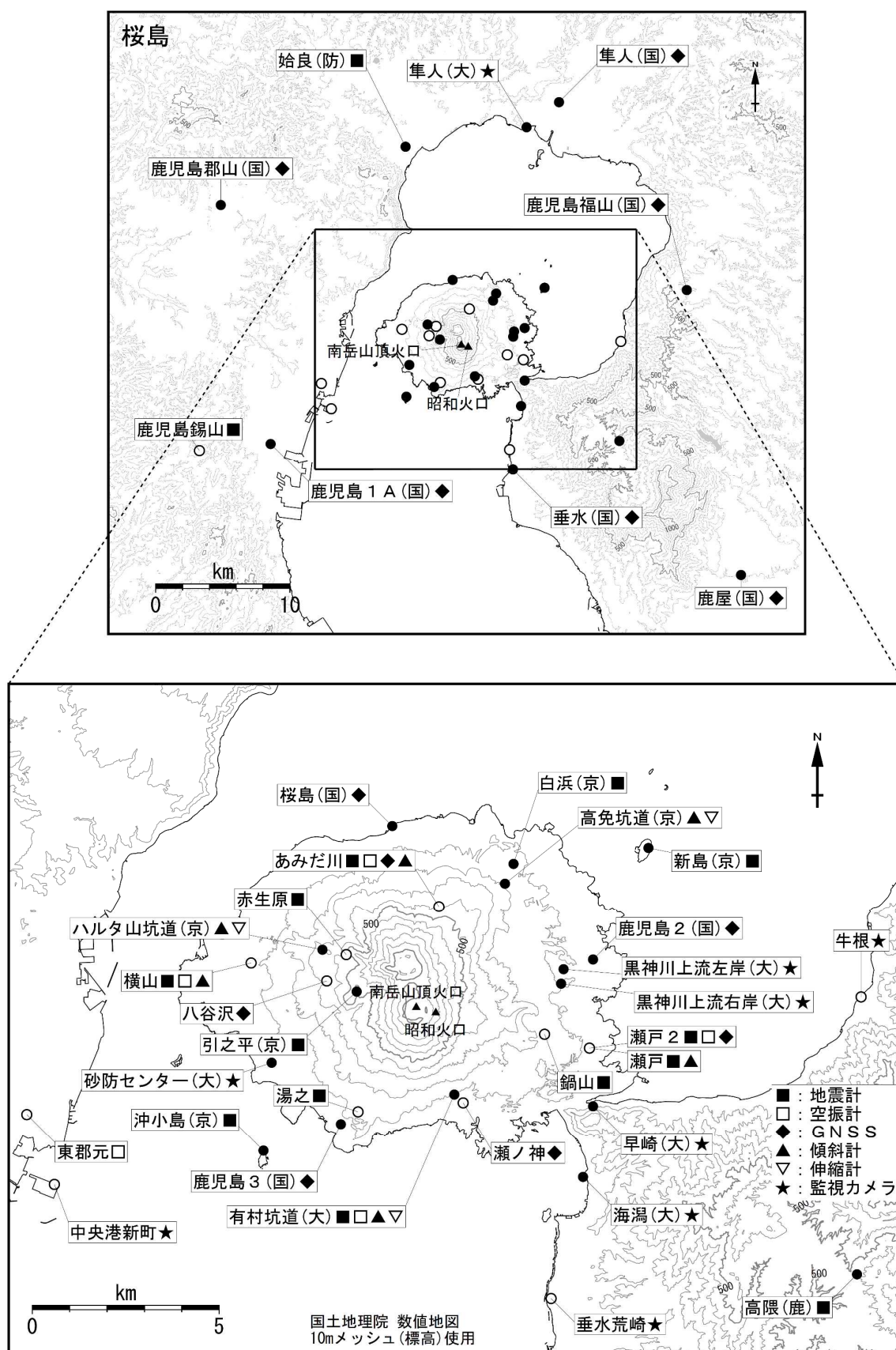


図 16 桜島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(大) : 大隅河川国道事務所、(京) : 京都大学

(鹿) : 鹿児島大学、(防) : 防災科学技術研究所

表3 桜島 気象庁（火山）観測点一覧（緯度・経度は世界測地系）

測器種類	観測点名	位置			設置高 (m)	観測開始 年月	備 考
		緯度 (° ' )	経度 (° ' )	標高 (m)			
地震計	横山	31° 35.46′	130° 36.72′	41	-85	2010. 8. 2	
	赤生原	31° 35.58′	130° 38.33′	455	0	1963. 12. 1	
	湯之	31° 33.31′	130° 38.53′	119	0	1963. 12. 1	
	瀬戸	31° 34.23′	130° 42.45′	50	-98	2010. 8. 2	
	瀬戸2	31° 34.25′	130° 42.44′	62	0	2010. 8. 22	広帯域地震計
	あみだ川	31° 36.28′	130° 39.90′	400	-101	2010. 8. 2	
	鍋山	31° 34.43′	130° 41.69′	130	0	1981. 4. 1	
空振計	東郡元	31° 33.27′	130° 32.92′	4	39	1994. 2. 25	
	横山	31° 35.46′	130° 36.72′	41	1	2010. 8. 2	
	瀬戸2	31° 34.25′	130° 42.44′	62	1	2010. 8. 2	
	あみだ川	31° 36.28′	130° 39.90′	400	2	2010. 8. 2	
GNSS	瀬戸2	31° 34.25′	130° 42.44′	62	3	2001. 3. 21	
	八谷沢	31° 35.20′	130° 38.00′	300	3	2006. 7. 19	
	瀬ノ神	31° 33.44′	130° 40.31′	65	3	2006. 7. 1	
	あみだ川	31° 36.28′	130° 39.90′	400	3	2006. 7. 21	
傾斜計	横山	31° 35.46′	130° 36.72′	41	-85	2011. 4. 1	
	瀬戸	31° 34.23′	130° 42.45′	50	-98	2011. 4. 1	
	あみだ川	31° 36.28′	130° 39.90′	400	-101	2011. 4. 1	
監視カメラ	牛根	31° 34.97′	130° 47.05′	2	10	1994. 3. 1	
	垂水荒崎	31° 30.60′	130° 41.80′	52	1	2017. 1. 11	臨時観測点
	中央港新町	31° 32.25′	130° 33.39′	8	3	2022. 4. 7 2024. 6. 14	臨時観測点（熱映像） 可視映像